第４０号　２０２２年7月２９日
社会福祉法人　福浜会

ふくはまの風

～　地域住民としての出発点　～

平成７年７月に法人の最初の施設『はまぼう』が開所しました。当時高校を卒業して１年の浪人期間中の私は、予備校へ通う日々で周囲にあまり関心が無く、歩いて１分程の場所に障害者の施設ができるんだ…ぐらいにしか気に留めていなかったような気がします。

そんな私ですが大学卒業後に浜松の会社に就職することになり、その後髙橋さんと話をする機会があって、縁あって福浜会の職員として働かせてもらい 19 年が経ちました。思い起こしてみると、そこが“福祉に携わる自分の出発点”だったように思います。

大学卒業してから間もなく地元の自治会において青年世代のメンバーで構成される中老会に所属して現在に至りますし、福田地区の消防団にも入隊して 10 年間活動しました。そんなわけで“福田の地域”にどっぷりの生活を今日も送り続けている私なんですが、この間ずっと『はまぼう』の存在を地域住民として常に身近に感じていました。まだ施設単体で交流会を行なっていた頃、地元のボランティアとして参加して焼きそばやお好み焼き等を汗だくになって作ったのを覚えています。そこには利用者さんや家族のまぶしい笑顔がありました。地元を大好きな人間が地元に根差して生活するなかで、いつしかこの場所で働くようになったのも、必然的な流れだったのかなと今になって思います。

そんな“出発点”があり、福祉に身を置いて仕事をしてきたなかで、利用者さんにとって自分ははたして安心して支援を受けられる存在だろうか。身を安心して預けられる存在だろうか。これでいいのだろうか…という葛藤を常に抱えていました。私たちの仕事の成果は利用者さんの心に形成され積み重ねられていくものであり、常に自問自答していましたが、その成果は周りから評価されないかぎり自分ではわからないですし、見えにくいものでもあります。冒頭に“出発点”の話をさせていただきました。普通なら出発があれば到着もありますが、福祉に、『これでいい、これが正しいという答え＝“到着点”』は無いと思うようになりました。

～　結びに　～

生まれ育ち、住み慣れたこの街で、利用者さんが街の人たちと共に自分らしく生きていくために、障害福祉に関する理解や、必要に応じて充実したサービスが受けられるような環境（事業所や社会資源）の整備が進んで、地域住民からの暖かい眼差しが溢れていることが理想と考えます。そして一番大事なことは安心、信頼できる“人”が傍にいることではないでしょうか。人と人の間に存在する“心”を繋いでいきたい。そのような地域作りを目指して、自分たちには何ができるだろうかという長期的な視点を持つことも大事ですね。

私を含め、ひとり一人にできることは微力ですが、家族の皆さんや一緒の目標に向かう職員たちと今日より明日、明日より明後日と…地域福祉が少しずつ、それでも着実に前進していくように歩みを共に進めていきたい。そんな思い（想い）でいます。

（自分の主体的な気持ち　…思い
相手にそうであってほしいという気持ち　…想い）

そるとぽっと施設長　　鈴木　良和